

わたしの戦争体験

八女郡広川町 堤 二三生

私は大正15年9月23日、八女郡長峰村（現在八女市）の片田舎で7人兄弟のうち二男として生まれ、幼少の頃、航空記念日に航空ショーが催されたので、母に連れられて見学に行きました。

会場では複数の戦闘機が超低空で飛来。急上昇し次から次、特殊飛行を演じ、その鮮やかさに感動。小さな胸にパイロットの夢を抱いたのです。

小学校4年（昭和12年）の時、上海で大山大尉殺されるの悲報が伝わると、まもなく日華事変勃発。私の村からも多数の人が軍隊へ、戦場へと送り出され戦死者が続々出ました。

私の父も38才で赤紙（召集令状）が来て、家族（妻と子供7人）を残して陸軍二等兵として応召。戦地（当時中国）に派遣されましたが幸いにも2年余りで無事除隊帰還いたしました。

戦争はその頃から、ますます激しくエスカレートして、昭和16年12月8日遂に太平洋戦争勃発。世はまさに軍国時代となりました。

私もその類にもれず、長峰尋常高等小学校卒業と同時に、14才で懂れていた陸軍少年飛行兵（14期）として東京陸軍航空学校に入校。1年間軍人としての基礎的教育を受けた後、操縦、通信、整備の三技から操縦科程を選び熊谷陸軍飛行学校へ。赤トンボ（赤く塗った2枚翼の練習機）で1年6ヶ月訓練を受けて、初度的操縦技術を習得。千葉県横芝の第39教育飛行隊に配属されました。ここでは、更に1年間戦闘機による操縦技術を磨き、運転免許証に代わる操縦記章を授与され、一人前のパイロットとして認められ第6航空軍（実戦部隊）の一員となりました。

それから間もなく本土は連日連夜の空襲で敗戦の色濃く、戦況ますます不利となり、昭和20年3月陸軍においては沖縄特攻作戦がスタートしたのであります。

私もどうせ散るなら特攻でと決意し、昭和20年5月、第87振武特別攻撃隊（12機編成）を拝命。日本列島を南下、いくつかの飛行場を移動し、鹿児島県川辺郡知覧町の特攻基地で待機、終戦を迎えたのございます。

振武特別攻撃隊は私の記憶では85隊まで出撃しているので、あと数日終戦が延びていたら87隊の私はこの世にいなかったであろうに。

東京陸軍航空学校入校以来、寝食を共にし励まし合い、猛訓練に耐え死を誓い合った友は、沖縄の空に散華、不帰の人となり、私は生き残り幸せな日々を送っている……。心のどこかにすまない気持ちで遠慮があり、申し訳なくただただ亡き友人のご冥福を祈るばかりです。

毎年5月3日知覧特攻基地観音堂前で開催される慰霊祭には、退職後（昭和59年）欠かさず参列し、亡き友と再会涙しております。

特攻基地を参観された方はご存じのとおり、特攻平和会館横に建てられた鎮魂の歌碑に

「帰らざる機をあやつりて征（い）きはや、

開聞よ母よ、さらばさらばと」

の一首が刻まれていますね。

知覧基地を飛び立った特攻機は、祖国の平和と繁栄を念じながら、薩摩富士と呼ばれている秀麗な開聞岳に別れの翼を振って、南の空へ消えて征ったのであります。

出撃前夜は、粗末な木造バラック建ての三角兵舎で毛布を頭までかぶり、思う存分涙を流した17才の特攻隊員もおり、枕は涙でびしょ濡れになっていました。最後の思い出にいろんなことを考えたことでしょう。

敵艦に体当たり爆弾が破裂するときは、万本の針が一時に身体を刺す痛みがするだろう。不幸にして敵艦に突込む前に弾が愛機に当り、燃え上がったときは、火焰がどんなに熱かろうと恐怖を感じた筈です。

でも、自分が体当たり、敵艦を轟沈すれば戦況も良い方に転じ、故郷の人々も助かるだろう！等々空想したと思います。

最後に爆弾を愛機に着け、滑走路から出撃発進する際、「お母さーん」と大声で叫びながら、エンジンをふかし飛び立った若き隊員もいたと聞いております。

二度とこのような悲惨な戦争を起こして、母と子供を引き裂くようなことがあってはならないと、強く肝に銘じ訴えるものであります。